

今日は、ハンディキャップをもちながらも、自分の長所・特技を伸ばした人の話をします。誰の話か想像しながら聞いてください。

子どもの頃、その少年は「ヨシちゃん」と呼ばれていた。生まれたとき、ヨシちゃんの足は曲がっていた。頭は水頭症のように腫れて柔らかく、眼球は安定せず、乳を吸う体力もなかった。生後3ヶ月もたてば座る首も、なかなか座らなかった。田舎の病院では病名が付けられず、周囲からは「先祖のたたりでは？」とささやかれた。

ヨシちゃんの成長を妨げたのは骨のもろさだった。ちょっとした力が加わると、音を立てて折れた。幼少期に骨折した回数は30回近くにも及んだ。その度に激痛が走った。両親も、祖母も、そんなヨシちゃんが不憫でならなかった。

そんなヨシちゃんには、大人も驚くような才能が一つあった。歌声だ。歌のうまさは誰もが称賛した。村祭りや宴会があるとヨシちゃんはスターだった。得意な『岸壁の母』を歌って村人たちを楽しませた。

小学校に入る頃、病名が分かった。先天性骨形成不全症。2万人に一人の割合で発症する原因不明の難病だ。骨が折れやすく、なかなか身長が伸びない。

ヨシちゃんは特別支援学校に入学し、寮生活となった。4年生頃になると病状も落ち着き、骨折もしなくなったので、地元の小学校への転入が認められた。この上ない喜びを感じた。

その後も入退院を繰り返したが、特別支援学校高等部の3年生にもなると、随分元気になり、進学も夢ではなく、現実のものとなった。迷わず音楽大学を選んだ。そして、ジブリ映画『もののけ姫』の主題歌を歌い、一躍脚光を浴びることとなる。

もう誰だか分かりましたね。日本を代表するカウンター・テナー歌手、米良美一さんの話です。

しかし、この後、さらなる人生の試練があった。自分の過去を恨み、自分の容姿をさげすみ、「絶対見返してやる！」という思いでがんばってきた。だが、歌手として成功したものの、何の幸福感もなかった。それどころか、自身の身体的コンプレックスに対して世間の目を過剰に気にするようになり、精神的に病んだ結果、歌えない、声が出ない日々を苦悩した。

そのスランプから脱出するきっかけになったのは、「ヨイトマケの唄」との出会いだった。少年時代に自分の治療費を稼ぐために土木工事現場で土にまみれて働いていた母親に対する想いと重なり、『ヨイトマケの唄』を自身の持ち歌にするようになった。それまで一切触れずに語らなかった自身の生い立ちについてテレビやマスコミで語るまでになった。

身長150cm弱の米良さんはこう言っていた。

「こんな体に生まれてきたのは、もしかしたら、僕自身が昔、『神様、今度生まれ変わるときは、あえて重い障害を背負って、そして土木作業員をやっているような両親に生まれてみたいです。そういう中で僕は親に孝行し、幸せを掴んで見せます。それが僕の魂を鍛えるのに一番良いと思いますから』と願ったんじゃないかと思っています。そしたら自分の人生、恨めませんよね。むしろ今はこの体、そしてこの自分を、心から愛おしく思えるのです」